

実は私、

中大出身で

Vol.2

秋元 康氏

作詞家

1977年
文学部
入学



附属高校、駿河台の学生街、
近代的で美しい多摩キャンパス…

僕に合った**自由な校風**
失敗こそ若さの**特権**
もっと“**遠回り**”をしよう!



インタビュー動画は
こちらから
ご覧になれます



「実は私、中大出身で」の連載第2回では、作詞やテレビ番組の企画構成、アイドルグループのプロデュースなど、エンターテインメントの世界で幅広く活躍している秋元康氏（1977年文学部入学）に話を伺った。秋元氏は「困難な壁や挫折に直面し、迷い、失敗する。それこそが若さの特権。何度でも間違ってい」と語りかけ、「好奇心をもって、若いうちはもっと遠回り（寄り道）をしよう」と後輩たちにメッセージを送っている。

（聞き手 「HAKUMON Chuo」学生記者、木村結＝法学部3年、金岡千聖＝商学部3年）

（映像撮影 中央大学広報室・中央大学放送研究会学生スタッフ）

《東京都出身の秋元氏は、当時は男子校だった中央大学附属高校（小金井市）から中央大学に進学し、高校・大学時代には放送作家として頭角を現していた。幼少から小学生の頃は小児ぜんそくを患い、活発に外で遊ぶような子供ではなかったという。高校2年生のとき、ふとしたきっかけでラジオ局で仕事をするようになり、その後の人生への大きな転機となった》

自由な雰囲気附属高校 高校2年で放送作家として活躍

—— 小児ぜんそくで体があまり丈夫ではなかったと伺っています。ご自身で振り返ってみて、どのような子供でしたか

秋元康氏 外に遊びに行くより、家で本を読んだりするタイプだったかもしれないですね。体が弱い、ぜんそくが出るというのもあったかもしれません。活発に外で野球をするとか、そういう子供ではなかった気がしますね。

—— 当時、将来の夢はありましたか

秋元氏 友達が漫画を描いていたから、「漫画家や漫画を描くことは面白いな」とか、小児ぜんそくだったから、「お医者さんの仕事は面白いな」とか、身近な人に子供の頃は影響を受けやすいですね。ただ、なった後の姿にしか興味がないので、漫画家や医師になるためにはどうすればいいのかまでは思い至りませんでしたね。僕は長男で兄や姉がいないので、そういった将来の進路の情報が少なかったのかもしれませんが。進学塾に通うようになって、そこの仲間たちが「将来、官僚になるんだ」などと、いろいろ教えてくれて「あー、そういうものなんだ」と思いました。彼らは兄や姉がいたんでしょう。だから、そういうことも知っていたんだと思います。彼らの方がはるかに大人でしたね。

—— 中央大学附属高校時代の思い出や記憶、そして高校時代から放送作家として活躍するようになったきっかけ、経緯



を教えてください

秋元氏 高校はすごく自由でした。何よりもよかったのは大学の附属高校なので、雰囲気などが大学っぽいなよね。校内の購買部にしても「自動車免許を取りませんか」みたいな掲示があって、僕は5月生まれで高3になるとすぐ18歳になるから、それを見て取りにいった。先生方もある種、生徒たちを大人扱いしてくれていた。僕にとってはとても良い高校でした。厳しく指導してくださる先生もいらっしゃいましたけどね。私服だったし、皆が自由に、当時はやっていたVANなどのいわゆるアイビー（米国のトラッドスタイルのファッション）の服を着たりしていました。食堂では、冷やし中華やカツカレーなどが人気でした。バレーボール部がすごく強かったという思い出もあります。

そして、高校2年のときにラジオを聴いていて、別に放送作家になりたいとか、はがき職人（注・頻繁にはがきを投稿する常連リスナーのこと、当時はSNSやメールは存在しない）だったというわけでもなく、「自分でも書けるのではないか」と思い、平家物語のパロディーのようなものを書いてニッポン放送に送ったら、「面白いから遊びに來い」と言われたのがきっかけで、放送作家という仕事を知るわけです。高2の冬くらいには、山口百恵さんのレギュラー番組の台本を書いていました。同学年の百恵さんはトップアイドルで、高校に行けば皆が「すごい百恵ちゃん、かわいい」とか、雑誌のグラビアを見て誰もが憧れるような存在でした。だけど、僕はラジオ局のスタジオで、目の前に百恵さ

んがいて、「このはがきを読んでもください」「この原稿を読んでもください」と渡していたので、ちょっと不思議な生活でしたよね。

「ああ、夢を見ていた」 時が止まり17歳の夏に戻る

人生を振り返ると、17歳の夏のときに、コクヨの原稿用紙を買ってきて…、何かそれは理由があったわけでもない。ただ書けそうな気がしたから書いた。それで原稿を書いて、ニッポン放送に送りました。いま67歳ですけど、僕の中では、何かあの時からずっと（時が）止まったままなんですよね。いまでも「ああ、夢を見ていた」「放送作家になって、作詞家になった夢を見ていた」っていうふうに。ふとした時に、高校生の17歳の自分に戻るような気がするんですよ。

《大学1年生のときは駿河台キャンパスに通った。盛んだった学生運動が収束を迎えていた頃だった。ロックアウト（校地封鎖）、革命を訴える学生、アメリカのヒッピー文化（愛と平和、反戦などをスローガンとした当時の若者のムーブメント）に影響を受けた人たち…。さまざまな人々が行き交う活気にあふれた学生街で、多感な時期を過ごした》

駿河台の学生街の思い出 自家用車でも多摩に通学

—— 大学在学中はちょうどキャンパスの多摩移転の時期とも重なっていましたが、駿河台時代を含め、どのような学生生



中央大学附属高校のクラスメートと旅行に出かけた際のスナップ写真（前列中央が秋元氏）

活を送られていましたか

秋元氏 附属高校から中央大学と、自分に合った校風というのかな。息苦しさがないというのが一番で、楽しかったですよ。駿河台キャンパスの近くにあった喫茶店と、カレー屋さんと雀荘。その3つを行き来していました。学生運動の本当に最後の頃だと思うけれど、時々ロックアウトになっていましたね。駿河台とその周りの学生街には、革命を訴える皆さんや、アメリカのヒッピーやフラワーチルドレンの影響を受けた人たちなど、本当に多種多様な学生たちがいて、でも、それを包括している大学という組織も自由で、世の中全体が面白かった記憶があるんですよ。

これを読んでいる大先輩たちはたぶん記憶にあると思うんですが、駿河台の裏手の門の近くに、すごくおいしいカレー屋さんがあったんですよ。今でこそ「卵のせ」とかあるけれど、生卵を上のにせて食べるというのは、僕はその店が初めてでした。よく古本屋さん巡りもしました。八王子（多摩キャンパス）に校舎が移転してからは、電車でも、自分で車を運転しても通いました。それも面白かったですよ。建物（校舎）などがとても近代的な感覚でしたね、美しかったですし。当時は車で来る学生がほかにもいました。今でも付き合っているのは、やっぱり高校、大学の友達が一番多いですね。

駿河台の方が頻繁に通っていましたが、放送作家の仕事が忙しすぎて、授業中ずっと、テレビやラジオの台本を書いたりしていました。うーん、不真面目ですね（笑い）。



中大生だった頃、高校時代からの友人とテニスに訪れた軽井沢で（左が秋元康氏）

当時、授業の出欠を取る出席カードを先生が配っていて、それを10枚くらい隠して取ったのですが、先生が曜日によってカードの色を変えていて、すぐにバレました。第2外国語はフランス語でしたが、今でも「Combien frère avez vous ?」という「あなたの兄弟は何人ですか」は言えるんです。パリに行って、「Combien（値段はいくらですか）」とお店の人に聞くことはできても、答えが返ってくると、それがいくらなのかはわからない。なぜ「Combien frère avez vous ?」が言えるかというと、授業で隣の席だったシミズさんという真面目な女性が「次、これだから、これだから」と、カタカナで紙に書いてくれたから。それを一生懸命に言ったというのを覚えています（笑い）。

—— ご多忙な日々の中で、母校・中央大学、中央大学附属高校のことを意識することはありますか。

秋元氏 いま、どこも少子化とか、受験者数が減っているとか、いろいろあって、さまざまな大学が危機感をもって施策にあたっている中、わが中央大学は大丈夫かな、という心配はしています。

《若い人たちが困難な壁に直面したり、挫折したりしたとき、その場で立ち止まってしまうことが一番もったいないと、秋元氏は語る。「乗り越えられないから壁なんです。でも迷わず、立ち止まらず、右か左に動く。動いた先が行き止まりで、間違っていたら戻る。その戻る力が大事」「間違いや失敗は若さの特権」と、自身の経験を踏まえて、後輩たちに訴えかける》

超えられない壁や分岐点 右か左へ走る、間違いなら全力で戻る

—— 後輩の中大生、附属高校生を含む若者たちにメッセージをお願いします

秋元氏 壁や挫折。いろいろな障害に直面すると思うんだけど、そこで皆、迷うんだよね。何日もそのことを考えるじゃないですか。恋愛の悩みでも、仕事の悩みでも、就職でも、学校でも、友人関係でも。でも、それはじっと考えていても何も始まらないんだよね。だから、壁に突き当たったときに右か左に移動しなさいと。移動するということはそこで立ち止まって考えるのではなくて、何かをしなければということ。何かをして、それが間違いだったら、元のところに戻ってくればいいし、間違いを改めればいい。一番損なのは、じっと考えて時間だけが過ぎてしまうこと。もったいないと思いますね。

2つの道があって、どちらにしようかとその分岐点ですごく迷う。僕もいくつもそういう機会があったけれど、そのたびに失敗することを恐れて、先輩にアドバイスをもらったり、資料を調べたり、慎重になるわけです。でも、慎重になっても結局は間違えるんですよ。それで学んだことは、結局、右か左の2つの道があったら、どちらでもいいから



全力で走ると。どちらかに向かって、その分岐点で一秒も迷うことなく。どちらかに走って、行き止まりだったら戻ってくる。間違っていたら戻ってくる。その体力こそが若さなわけです。さすがにいま僕は67歳で2つの道があって、どちらにしようかなと思って、たとえば作詞家をやめて違う仕事をしようと思ったときにね、これがあなたたちみたいに10代、20代だったら、よしやってみようと思えるけれど、やっぱり67歳になって戻ってくるのは大変だからね。だから、年を取れば取るほど大変だから、どちらかの道を選べなくなるんですよ。だから、それは若さの特権。あなたたちは何度間違えてもいいわけです。

つまり人生は…、たとえば零点何ミリのすごく細いペンで一度も間違えずにリングを描ける人はいない、よほどの天才画家でなければ。だから、皆、4Bや5Bの柔らかい鉛筆で輪郭を何本も線でぼんやりと描くじゃない。あれと人生は同じで、何度も、何度も、何度も修正しながら、ちょっと行き過ぎたかな。ちょっと出っ張ったかなと思いながら、なんとなくあなたたちが大人になったときに、「あっ、こういうことか」とわかると思う。初めに零点何ミリのペンを持って、絶対に間違えないようにしようということは無理だと思いますよ。

——もし若い頃に戻れるとしたら、何かやっておきたいことはありますか

秋元氏 ないですね。若い頃に戻ったら大変だなんて。また同じだけ67年間、生きなきゃいけないと思うと大変ですから。あー、よかった、67歳で（笑い）。

《「好奇心こそが人生を決めてきた。面白いと思えることが僕には重要」「人間同士は運命でつながっていて、出会いたいと思っていると、どこかでつながっていくようにできている」—。作詞やプロデュースなどのクリエイティブな仕事に取り組む姿勢や、運命的ともいえる人々との出会いについて、秋元氏はこれまでのインタビューや講演で、そうした言葉で表してきた。作詞という仕事に向き合う中で大きな節目となった、歌手の美空ひばりさんとの縁、出会いについても尋ねた》

好奇心…なくなったら仕事をやめる 人と人を結ぶ縁や運

——創作のモチベーションとなる好奇心を保つ秘訣、長く第一線で活躍できる秘密はありますか

秋元氏 好奇心は保つものではありませんが、でも、それがなくなったら仕事をやめようと思っています。僕らの仕事は定年がないわけです。サラリーマンの方であれば「何歳で定年」となるけれど、僕らはない。野球などのスポーツ選手のような感じでしょう。「次の球を打たれたら、もう引退しよう」という、その引退を自分で決めるとすると、僕の場合は、好奇心がなくなったらやめようと思うんです。でも、好奇心は次々にわいてきてしまう。好奇心って何だろう。「気づくこと」かな。たとえば街を歩いていて、行列を見かけたら、何の行列かはわからないけれど、並んでみたいと思うか、スルーするのか。カレーがおいしいレストランで、カレーを食べるのか、「カレーがおいしいんだから

ハヤシライスもおいしいはずだ」と思って、ハヤシライスを頼むのか。そこが興味じゃないですか。そういうことの遠回りを皆さんの世代はもっとした方がいいと思うんだよね。多摩キャンパスに通学するにしても、モノレールの1つ手前の駅では普通は降りない。2つ手前の駅でも。でも、手前の駅に何かがあるかもしれないという、面白そうだということを楽しまないと、単なる大学までの通学時間でしかないじゃないですか。

——美空ひばりさんに「川の流れるように」（美空ひばりさん最後のシングル曲、1989年1月発売）を提供された経緯やエピソードを教えてください

秋元氏 人と人は何かの縁で結ばれていて、もっと言うと、人だけではなくて、全てが縁とか運で結ばれているわけでしょう。僕がなぜ高校2年のときに突然、台本を書こうと思って、原稿用紙を買ってきたのかもわからないし、なぜ書いたのかもわからないし、なぜニッポン放送に送ったのかもわからない。そのときに読んでくれたニッポン放送の亀渕昭信さん（同社の元DJ、元社長）や、放送作家の奥山^{てるのぶ}伸さんが「面白い高校生がいる」と。その縁がなかったら、台本はゴミ箱に行っていたかもしれないし、何もスタートしていないわけですね。

美空ひばりさんとのご縁は、プロデュースしていた女性アイドルのレコーディングの際に、ディレクターから「秋元さん、次は誰と仕事をするんですか」と聞かれて、「美空ひばりさんのような自分とは全然遠い距離にいる方の詞を書きたいな」と答えたのがきっかけでした。その頃はいろいろなアーティスト、アイドルをプロデュースしたり、歌詞を書いたりしていました。そのディレクターがたまたま（ひばりさんのレコード販売元の）日本コロムビアの方だったので、「秋元さんがこんなことを言っていましたよ」と会社に戻って話したそうです。ひばりさんのプロダクションでも「何か新しい面白いことをやろう」「だれか面白い人はいないかな」という考えがあったので、それが結び付いて、「じゃあ、秋元さんプロデュースでやろう」という話になった。小さな点がつながって線になって面になっていったということでしょう。

「とても良い詞ね」 ひばりさんの一言で「作詞家」に

そういう意味で縁を感じるし、その頃の僕は大学も中退して全てが中途半端で、たまたま放送作家や作詞家で食べていけるようになりましたけれど、ちゃんと勉強したわけでもなく、「このままではメッキが剥がれるな。だから、勉強し直そう」と、ニューヨークに行こうとしていた。（ひばりさんとの）プロジェクトは始まっていたんだけど、ひばりさんが病気で倒れて入院されたので延期になり、のちにひばりさんが元気になられて、「また再開しましょう」という連絡をいただいたのが、ニューヨークに渡って1年半くらい経った頃でした。アメリカのエンターテインメントの



“ハードル”が高くて、とてもじゃないけれど、なかなか通用しないかと挫折しかけていた。イースト・リバーの近くのコンドミニウムに住んでいて、「あー、この川も海につながって、日本につながっているんだろうな」と感じたりしていたように思います。

当時30、40代の作曲家で演歌をかいたことがない4組のアーティストに曲をお願いして、先にメロディーがあって、カセットテープの曲をヘッドホンで聴きながら、それに合わせて歌詞を書きました。「カフェ・ランターナ」というワシントンスクエア・パークの近くにあるカフェで、その頃は手書きだったので、原稿用紙を広げてね。普通は（歌詞の）中身が決まって、サビなども決まって、最後にタイトルを考えるんだけど、「川の流れるように」だけは、もう原稿用紙を広げてペンを持ったとき、1行目に「川の流れるように」と書いていたんですよ。理由はわからないんですが…。その後、いろいろなインタビューを受けて、だんだんと、その理由は、きっとイースト・リバーを見ていたからということと、日本への望郷の念が重なっていたことなんだろうなと思っています。

《「川の流れるように」は、「美空ひばりさんからの応援歌」をコンセプトに制作された。川の流れが人々の生の象徴であるかのように、心に沁みいる楽曲だ。「みんな、それぞれ



いろいろな川があるけど、最後は同じ海にそそぐのよ」。秋元氏は、レコーディングの際のひばりさんの言葉がいまも胸に残っているという》

美空ひばりさんは戦後、天才歌手として多くの日本人を勇気づけた人です。「ひばりさんが応援歌を歌ってくれたら、皆が元気になれるんじゃないか」というのがコンセプトでした。「人生なんて本当に川の流れのようなものだから、人それぞれ、流れが速かったり遅かったり、川幅が広がったり狭かったり、いろいろな川があるんだから、自分なりの川でいいのよ」という歌を作ろうと、そのとき思っていましたね。レコーディングのときに、ひばりさんが「この詞はとても良い詞ね」とおっしゃってくださったので、そのとき以来、「作詞家」という肩書きを使うようになったんです。ひばりさんは「確かに人生というのは、あの『川の流れるように』みたいなもので…。だけどね、秋元さん、みんな、それぞれいろいろな川があるけど、最後は同じ海にそそぐのよ」ともおっしゃった。そのときは深いことをおっしゃるくらいに思ったんだけど、ひばりさんはそれからしばらくして亡くなってしまった。きっと、ある種、覚悟めいた何かを持っていたのか…。歌謡界の女王となっても、「もう、みんな同じよ、最後は」というふうに思われていたのかなと。「川の流れるように」は本当はシングル曲にする予定ではなくて、(アルバムの別の収録曲の)「ハハハ」という曲をシングルにしようと思っていたん

です。でも、ひばりさんがどうしてもあの曲がいいとおっしゃるので。うん、だからそれも縁ですね。

—— 美空ひばりさんをはじめ、さまざまな方々と仕事に携わる中で、縁や運はどのように紡がれていったのでしょうか

秋元氏 放送作家として売れたりしても、あるいは作詞家として売れても、続くわけがないなというのが自分の中ではありましたよね。これが一生の仕事として、食べていけるとは思わないから、ずっとアルバイト感覚でした。要するに、仕事がなくなったら大学に戻ろうみたいな。だからギリギリまで大学に籍を置いていたんだと思うし。ところが、それが縁と運で、何かがこう終わりかけると、たとえば、あるテレビ番組が終わりかけると、違う番組の話が来たり、そこで出会った人と今度また番組を作ろうとか。そういうことが繰り返りつながってきたんだと思うんですよね。(美空ひばりさんとの出会いと同じように) 点が線になり、面になってきたということなんだと思います。

—— 高校・大学時代に放送作家として活躍されていたことを、ご両親はどう受け止めていましたか

秋元氏 僕の父親はサラリーマンでした。ずっと続くわけはないと、父も思っていたけれど、よくぞ高校生の僕が放送局に行くことを許してくれたなと。そういう意味では、理解のある父親だったと思いますし、母も「若いときに好きなことをやりなさい」と。放任主義とは違う自由を許してくれる両親だったと思いますね。

《秋元氏は、作詞家として生涯に5000曲以上の作品を残し、数々のヒット曲を生み出した阿久悠さんに「日本最高峰の作詞家」と賛辞を送っている。「阿久さんは世の中をどこか憂いていて、美学をもって、真摯に時代を眺めていた」と、2008年のNHK番組「秋元康が語る阿久悠」で評していた。「僕は阿久さんの歩いた道を歩いている」とも》

—— 阿久悠さんは秋元さんにとって、どのような存在だったのでしょうか

秋元氏 本当にとても偉大な作詞家で、阿久悠さんの歩いた道を僕が後から歩いているような…。(阿久さんは)たとえばもともとが放送作家で、番組を作り、その後「スター誕生」というオーディション番組を作って、そこからスターを生んだりとか、そういう経緯が、歩いてきた道が似ているということもあるけれども。「ピンポンパン体操」から、都はるみさんの「北の宿から」、沢田研二さんの「勝手にしやがれ」から、ピンク・レディーの「UFO」などと、あれだけ多岐にわたって歌詞を書ける人は、阿久さん以外にいないと思うんですよ。阿久さんは言うなれば料理人で、職業としての料理人を極めた方で、中華料理を作ろうが、イタリアンを作ろうが、フレンチを作ろうが、日本料理を作ろうが、完璧に作るという方だと思うんですよね。

作詞家はやっぱり諸先輩がすばらしすぎて、たとえば、なかにし礼さんは立教の仏文(立教大学文学部仏文学科卒)



秋元康氏

あきもと・やすし。1958年生まれ、東京都目黒区出身。中央大学附属高校を卒業後、1977年中央大学文学部史学科入学、1982年中退。高校在学中から放送作家として頭角を現し、以来「ザ・ベストテン」など数多くの番組構成を手がける。2008年日本作詩大賞を受賞。作詞した楽曲は日本レコード大賞を4回受賞（2011、2012、2017、2018年）。2012年日本レコード大賞作詩賞を受賞。このほか、テレビドラマ制作、映画監督、CMやゲームの企画など幅広いジャンルで活躍している。2015年には作詞したシングルの総売上枚数が前人未達の1億枚を超えた。2022年紫綬褒章受章。

でシャンソンから入っているから、非常に文学的なものをお書きになっているし、松本隆さんは「はっぴいえんど」というバンドから始まっているから非常に音楽的な詞をお書きになる。やっぱり、人間は結局、歩いてきた道や生きてきたものが血となり肉となるから、発せられる言葉や発想もどういう人生を歩いてきたかによると思うんですよね。

売れることは“支持”の証し 「正解のない仕事」

——最近、この曲はすばらしいと感じたアーティストはいらっしゃいますか

秋元氏 たくさんいますよ。僕らは職業作詞家だから、やっぱり、その人（歌手）を想定して書くわけですが、いまのアーティストは皆、ソングライターかシンガーソングライターが多いですね。たとえば、RADWIMPSの野田洋次郎さん、米津玄師さんにしても、King Gnuにしても、ヒゲダン（Official髭男dism）にしても、売れるというのは結果でしかないんだけど、別に売れるためにやっているわけで

はないんだけど、でも、売れるということはそれだけの支持を得ているわけだから。そういう意味では売れる理由が分かるよね。すばらしい作品が多いなと思っています。

——作詞やプロデュース以外の仕事をされているご自身を想像することはありますか

秋元氏 うーん、どうだろうな。あまりないですね。ただ、アートや建築などが好きなので、そういうのを見ていると…。アートとか建築とか、相通ずるところがあるのは「正解のないもの」が好きなんだということです。正解があるものというのは、自分にとってはなかなか整合性が取れない。「何だかもう、これでもいいじゃないか」と思ってしまふからね。そういう意味では、ほかの人生を歩んでいたとしても、正解のない仕事をしているんじゃないかなと思いますけれどね。でも、言ってみたら、どんな職業でも正解はないよね、きっと。それは政治家でもね。どんなに主張してもその人が正しいかどうかはわからないし、人生そのものが正解がないのかもしれないけれどね。

——睡眠時間は3時間ほどとっています

秋元氏 今はもうどうだろう。6時間か7時間は寝ていますね。確かに60歳くらいまでは、たぶん一日3、4時間しか寝ていなかったと思うんですけど、年を取ってきて、「やっぱり寝ないとだめですよ」と言われて、寝るようになって。だから、いま一番楽しいのはぐっすり眠ることかな。寝るっていいなあ（笑い）。「なんで60年間もゆっくり寝なかったんだろう」と思うくらい。あなたたちだったら、休みの日に10時間、寝ちゃったとか可能でしょう。年を取ると絶対にそんなには眠れないから（笑い）。

——これまで手がけたプロジェクトで満足できたものはありますか

秋元氏 たぶん、ないから次のことをやるんだと思うんですよ。映画監督のアルフレッド・ヒッチコックが、「あなたの代表作は？」と聞かれて、必ず「ネクストワン（次の作品）」と答えていた気持ちがわかる。つまり、満足したものを作れたら、そこで満足してしまうんだから。だから、「いや、もっとできたはずなのに」とかね。そういうふう思うから、違う題材や違うテーマで新しいことをやってみようと思うんじゃないかな。



秋元康氏を囲んで、学生記者と撮影担当の放送研究会学生スタッフ。インタビューは和やかな雰囲気で行った＝2025年9月18日、都内の事務所